



7-17

水鳥

琵琶湖の湖岸域には多様な水鳥が生息しています。特に冬期は水鳥の種数や個体数が多く、琵琶湖が国際的に重要な湿地である根拠となっています。春から夏にかけては湖岸のヨシ群落で水鳥が繁殖します。

1. 琵琶湖で越冬する水鳥

琵琶湖の湖岸は、特に冬期はカモ類を始めとする10万羽以上の水鳥の採食・休息場所として利用されており、水鳥等にとって重要な生息地となっています。琵琶湖は、ラムサール条約で国際的に重要な湿地であると判定される水鳥の個体数2万羽をはるかに超えます。また、10種前後の水鳥の種・亜種または地域個体群で国際的に重要な湿地と判定されるラムサール条約の1%基準値を超えています。

琵琶湖で越冬する水鳥には、カモ科（ハクチョウ類やガン類を含む）のほかに、クイナ科、ウ科、カイツブリ科、アビ科、カモメ科、サギ科、チドリ科、シギ科などの種類も含まれます。この20年間（2005～2024年）の滋賀県内で越冬する水鳥の平均個体数の多い上位5種は、オオバン（クイナ科）、キンクロハジロ、ヒドリガモ、マガモ、ホシハジロ（以上の4種はカモ科）となっています（日本野鳥会滋賀 保護部 2024）。このうち主に沈水植物を採食しているオオバンとホシハジロの越冬数は、この20年間の中でも年によって大きな増減が見られています。水鳥の個々の種の生態や湖内での分布傾向、過去の個体数変動については、ページ下のURLまたはQRコードでリンクされている琵琶湖生物多様性画像データベース（滋賀県琵琶湖環境科学研究中心提供）の鳥綱（鳥類の分類単位）をご覧ください。

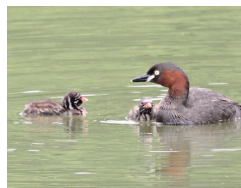


写真7-17-1 県鳥・カイツブリ

2. 湖岸のヨシ原で繁殖する鳥

琵琶湖湖岸には孤島状にヨシ群落が残っています。大面積のヨシ群落では、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ヨシゴイ、サンカノゴイ、カルガモ、バン、オオバンといった水鳥やヨシの茎に巣を架ける小鳥のオオヨシキリ、コヨシキリが繁殖しています。タカの仲間のチュウヒもヨシ群落中に巣を作ります。しかし、県鳥・カイツブリの繁殖密度は1980年代に大きく低下しました。サギ科のサンカノゴイとヨシゴイは絶滅の危機にあります。これらの水鳥の減少要因としては、外来魚の増加による魚類群集の変化など湖岸湿地生態系の劣化が関係していると思われます。

龍谷大学 須川 恒、名城大学 橋本 啓史

【琵琶湖生物多様性画像データベース】

https://www.lberi.jp/iframe_dir/species/tyoukou.html